一紅灯丸山驟雨

日本の七道のひとつ、西海道は、筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向、薩摩、そして大隅の九国を走る街道を総称する。

西海道の主たるものは、豊前小倉から肥前長崎に向かう長崎街道、小倉から薩摩に向かう薩摩街道、肥後熊本から豊後府内（大分）を往来する豊後街道、小倉から日向灘沿いに走る日向街道の四街道であった。さらには、脇往還として平戸路、日田往還、筑前六宿街道などが走っていた。

安永二年旧暦七月の夕暮れ、秋の気配につかれた日田往還、西国郡代領日田を見下ろす峠に差しかかった一人の若い武士の姿があった。

江戸は深川六間堀の金兵衛長屋の住人、坂崎磐音だ。

菅笠の縁を左手で上げた磐音の額にはうっすらと汗が光っていた。

日田は筑後川の上流に臨む山紫水明の地として知られていた。なにより日田を日田たらしめたのは、九州一円に割拠する外様大名に睨みを利かせ、豊後、豊前、日向の天領十五万石を支配したことである。

九州一円の大名を監察する代官領は、宝暦九年には西国郡代と改称された。

山国の郡代領を多くの脇往還が交差して、物品が流通した。まずは年貢米が日田に集まった。

これらを請け負ったのが掛屋である。掛屋は年貢米の取り扱いで力をつけ、諸大名や豪商に金を貸し付ける資本家に成長していく。政治的な力を背景にした郡代御用達（掛屋）としての金貸し商人たちは、「日田金」と呼ばれる高利の資本を動かして九州の金融資本の中心となっていた。

それだけに紅や黄色に染まった葉影を透かして見下ろす日田の町は、山国とは思えないほどに整備されていた。

磐音に、日田へ下りる最後の坂道に踏み出した。

すると街道に覆いかぶさるように繁る杉林から一人の男が転がり出てきた。坊主頭に道中用の野袴を穿いて、背には斜めに風呂敷包みを負い、腰に小刀を差していた。

磐音に気付いた男性は、一瞬どきりとした驚きの表情を見せた。が、菅笠の下の穏やかな顔を見て、にっこりとした笑みに変えた。

「驚かしたかな」

「坊主頭の熊もいませんからね」

のんびりした声で磐音が答えた。

「江戸の方ですか」

男は坊主頭についた杉の葉を払い落としながら訊いた。

「深川の長屋住まいです」

「かような西国の山中で江戸の住人に会うなど、天から落ちる隕石にあたるようなものですよ」

「そなた様も江戸の方ですか」

二人は肩を並べて、街道を日田へと下りながら会話を交わした。

「出は若狭小浜ですが、ここ数年は江戸に住まいしております。蘭医の中川淳庵です」

「それがし、坂崎磐音と申します」

「坂崎さんは、日田に参られるのですか」

「日田は通過するだけで、行き先は肥前長崎にございます」

「これは奇遇。私も長崎に参るところです」

「ほう、連れができましたか」

中川淳庵と磐音は、顔を合わせた。

このとき、淳庵は三十五歳、磐音は二十八歳であった。

ふいに峠の上から乱れた足音が響き、淳庵が再び顔色を変えて、坂下へ走りだそうとした。

「お待ち下さい。たれぞに追われておられるのですか」

「そういうことです」

淳庵は、磐音に呼び止められて迷ったように足踏みした。

坂上から走り下ってきたのは、異形の五人だった。

薄汚れた白い僧衣に布で編んだ太い丸帯を締めて、大きな頭には丸笠を被っていた。頭分だけが一本歯の足駄を履き、他の四人は草鞋がけだ。頭分は鉄の輪をつけた金棒を、四人は使い込んだ赤樫の六尺棒を携えていた。

「もはや逃さぬ」

一本歯の足駄の男がそう言うと、南無妙法蓮花経と重ね書きした丸笠を脱いだ。

夕暮れの光に坊主頭がてらてらと光る。

四人の仲間も真似て丸笠を脱いだ。

「淳庵、もはやそなたが長崎を見ることはない」

鉄の輪をじゃらじゃらと鳴らして頭分が構えた。するとその面体に血と死の匂いが漂った。

僧形ながら、殺しを職としてきた人間の凶暴と醜悪の臭いが峠道に漂った。

「お手前方は何者ですか」

淳庵を背後に回しつつ磐音の声がのどかに響いた。

「旅の者か。死にたくなくば早う去れ」

頭分が命じた。

「乱暴ですね」

磐音の落ち着いた声に頭分が苛立った。

「面倒じゃ、こやつも地獄に送り込め」

その言葉に四人が半円を作り、杉林を背にした磐音と淳庵を囲んだ。頭分だけが輪の外にいた。

「お名前を伺っておきましょうか。日田代官所に届け出るときに訊かれると思いますので」

「おのれ、江戸は裏本願寺奇徳寺僧都、岸流不忍坊を愚弄するか。東角、西丸、南千、北面、二人とも叩き潰せ」

「おうっ！」

声を揃えた四人の坊主は赤樫の六尺棒を磐音に突き出すように持ち、次いで一斉に立てた。

その動きは無駄がなく、長年修羅の場で血なまぐさい仕事を続けてきたことを示していた。

磐音は始めて備前包平二尺七寸の豪剣の柄に手をかけた。

「おのれ、われらに逆らう気か」

不忍坊が叫んだ。

「江戸を離れた遠い地で冷たい死骸になりたくはないですからね」

磐音の声が終わらぬうちに、立てられた四本の棒がばらばらに磐音の体に叩き込まれた。だが、一見ばらばらに見えて、磐音の動きを封じ込めようとする意図が隠されていた。

磐音は最初に斜めから振り下ろされた左右の棒を見つつ、春風でも舞いそよぐようにふわりと正面の二人の間に走り寄っていた。

二人の六尺棒は左右の仲間より少し遅れて動き出していた。

その間隙を磐音は突いたのだ。

磐音は坂崎家伝来の包平を引き抜き、振り下ろされる二本の六尺棒を真ん中から次々と切断すると、二人の体の間を抜けて半円の外に出た。

その眼前に金棒を立てた不忍坊がいた。

磐音の包平が清流を泳ぐ鮎のように虚空で翻り、不忍坊の肩口を襲った。

不忍坊は身軽にも巨体を翻すと、磐音の攻撃圏の外に飛び退いていた。

むろん磐音に斬る気はない。追い払えばいいことだ。

「江戸者か、名を聞こう」

「坂崎磐音と申します」

磐音は包平を提げて答えた。

「流儀はいかに」

「直心影流を少々かじりました」

不忍坊はしばし考えた末に、

「今日は引き上げじゃあ」

と両断された赤樫の棒を手に呆然とした手下たちに命じた。そして再び、

「淳庵、長崎の地は二度と踏ませぬ。心しておけ」

という脅しの言葉を残すと坂下へ、日田の代官領へと走り下っていった。

磐音は包平を鞘に戻した。

「助かった」

淳庵がほっとした声を出した。

「江戸から刺客につけ狙われておられますか」

「奴らの裏をかいて、摂津湊から豊後への荷船に乗せてもらったのですが、それを承知していたとみえ、陸路を先回りされたのです」

淳庵は不忍坊らの姿を府内（大分）に見かけて、必死に日田街道に逃げ込んできたところだと、落ち着きを取り戻して説明した。

二人は薄暗くなった街道を日田へと下りていきながら、自然とその話を続けることになった。

「中川さんはなぜ僧侶の刺客に狙われるのです」

どうみても淳庵が金目のものを持参しているとは思えない。

「話せば長くなりますが、旅の徒然に聞いてもらうとしますか。なにしろ、坂崎さんにはたった一つの命を助けられたのですからね」

と苦笑いした淳庵はいきなり、

「坂崎さんは、『ターヘル・アナトミア』という言葉を聞いたことがありますか」

「いえ、異国の言葉ですね」

「阿蘭陀国の医学用語で、私たちは『解体新書』と翻訳しました」

磐音にはさっぱり理解のつかぬ話だった。

「二年前の明和八年、幕府の許しを得て、千住の小塚っ原で刑死した者の腑分けをしました」

「存じております」

と、磐音の声はいささか上擦ったものになった。

「豊前中津藩の前野良沢、杉田玄白先生ら蘭医の方々が、人の体の仕組みを調べるために腑分けをしたと聞きました」

「私はその一人です」

「そうでしたか」

「私たちがそのようなことを考えたのには理由があります。人の体の仕組み、五臓六腑や血管や骨や筋肉の構成が分かれば、病の治療の方法も格段と進歩する。玄白先生と良沢先生が解剖学の「ターヘル・アナトミア」という本を手に入れられたのを機に、私たちは本物の人間の腑分けを試みて、実際にこの目で確かめたのです。その折り、この本の正確な知識に驚かされました。私たちが考えていたことが間違っていることもたくさんあったし、なにより無知でした。そこで二人の先生と私は、『ターヘル・アナトミア』を日本語に翻訳して、多くの医師たちに知ってもらおうと考えたのです。

淳庵が話しだしたことは、磐音が想像もしなかったことだった。

「この本の元々のものは、独逸人のクルムスが書いたものを、阿蘭陀人のディクソンが阿蘭陀語に翻訳したものです」

「…………」

「玄白先生も良沢先生も蘭学を学ばれた方、いくらかは蘭語がおできになりましたが、片言ながら喋って意思を伝える言葉となると、なんとも難解極まる仕事でした」

「そうでしょうね」

と磐音は相槌を打ったが、それしか淳庵の話に応じる術がなかったからだ。

「ようやく道半ばに達して、本文四巻、付図一巻の下訳の完成にこぎつけました。それでも阿蘭陀商館長の江戸参府の折りに、翻訳が正しいかどうか見てもらいながらの下訳完成です。ここまでに何回も草稿を書き改めましたが、まだまだ不十分です。そこで私が長崎に出向き、阿蘭陀商館の医師どのと膝を突き合わせて、助言を受けることになったのです」

「はい」

二人はすでに峠道を下りきり、日田の代官領の町並みの端に差しかかっていた。

日田は筑後川をはじめ、何本もの川が町を流れる地だ。

夕闇の中に、あちこちから瀬音が響いてきた。

しっとりとした町並みが常夜灯に浮かんでいた。

「先ほどの不忍坊らは背中の翻訳が狙いですが」

「そうです」

「裏本願寺別院奇徳寺など聞いたこともありませんが」

「真宗十派の一つなどと勝手に広言していますが、浄土真宗の本願寺とは縁もゆかりもない連中です。岸流不忍坊ら暴れ坊主を率いるのは、親鸞の流れを汲むと称する血覚上人でしたね、一種の狂信者です。神仏が与えたもうた身体髪膚を切り刻んで腑分けをなすなど人間の所業にあらずというわけで、われらの行動のことごとくを邪魔してきたのです」

磐音にもおぼろに分かりかけてきた。

「さようなことを言う狂信者を、幕府は取り締まらないのですか」

「そこです。幕府の中には町衆の中にも神官僧侶の中にも、血覚と同じ考えをなさる方がおられましてね。私たちの行動は、神仏を冒涜するものと密かに応援をなさっておられるのです」

「初めて伺いました」

「先駆者が迫害を受けるのはいまに始まったことではありませんよ。宝暦四年に京にて、山脇東洋先生らが刑死した者を腑分けして以来、いろいろなかたちでの邪魔は繰り返されてきました。そんなことに負けるわけにはいかないのです」

淳庵の言葉には、確固たる覚悟があった。

「坂崎さん、あなたも長崎に行かれると言われましたね」

「はい」

「済まぬが、長崎で同道してくれませんか。また不忍坊が現れると、私ひとりでは抵抗もできません」

「旅は道連れと申します。お供いたします」

「助かった」

淳庵の声は喜びに弾けた。

「ただし、貧乏医師です。なんのお返しもできませんが」

磐音が笑って訊いた。

「中川さんは、長崎をご存じですか」

「長くはありませんでしたが二度ほど滞在して、知己もいます」

「ならば、長崎にて助力を願うやもしれませぬ」

「金と力以外ならばなんとかできましょう」

偶然にも日田街道の山中であった二人は、長年の友人のように笑い合った。

「となると、今晩の旅籠をどこぞに見つけねばなりませんね」

「そのことならば、心配ご無用」

「日田に知り合いがおられるのですか」

「前野良沢先生は豊前中津藩のお医師でしてね。私が日田街道を選んだのもそのためなんです。日田は儒者や学者を幾多輩出した地だそうで、良沢先生の友人の大蔵家をはじめ、多くの知り合いがおられる。今晩は大蔵家へ厄介になろうと、良沢先生の紹介状を持っています」

「それがしもよろしいのですか」

「厄介になるのに一人も二人も一緒でしょう」

淳庵は磊落な性格か、そう言うと、

「さて、たれぞに大蔵家を聞きなければな」

と流れに架かる橋の上で立ち止まり、人影を探した。